



TITLE:

On a Duality for Locally Compact Groups (作用素環研究会報告集)

AUTHOR(S):

斎藤, 和之

CITATION:

斎藤, 和之. On a Duality for Locally Compact Groups (作用素環研究会報告集). 数理解析研究所講究録 1968, 49: 41-58

ISSUE DATE:

1968-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/107728>

RIGHT:

On a duality for locally compact groups

東北大 理 齋 藤 和之

§ 0. まえがき

最近辰馬氏により局所コンパクト群に対する双対定理が、
いかなる濃中双対定理の一般化として証明された。[5]
一方 W. F. Stinespring は [3] の中で作用素環における非
可換積分論の応用として、局所コンパクトユニモジュラ群に
対する作用素環的な双対定理を証明した。

本講演では、かなりずいぶんユニモジュラでない局所コンパクト群に Stinespring の双対定理を拡張できることを述べよう。[8]

§ 1. 準備

Ω を局所コンパクト Hausdorff 空間とし、 μ をその上の非負値 Radon 測度とする。

$L^\infty(\Omega)$, $L^p(\Omega)$ ($1 \leq p < \infty$) を、それぞれ Ω 上の複素数値、

本質的有界函数, p 乗可積分函数全体とし, $C_c(\Omega)$ ($C_\infty(\Omega)$) を, Ω 上のコンパクトな台をもつ (∞ で 0 になる) 複素数値函数全体とする。

今 G を局所コンパクト群とし, μ をその上の左 Haar 測度とする。Haar 測度の理論によつて, 任意の $x, y \in G$ に対して, $\Delta(xy) = \Delta(x)\Delta(y)$ を満す正值連続函数 Δ が存在し, これはさらに

$$(1) \quad \int_G f(xy) d\mu(x) = \Delta(y^{-1}) \int_G f(x) d\mu(x) \quad (\forall f \in L^1(G))$$

$$(2) \quad \int_G f(x^{-1}) \Delta(x^{-1}) d\mu(x) = \int_G f(x) d\mu(x)$$

を満す。又 $L^1(G)$ の元 f, g に対して, 合成積を

$$(3) \quad (f * g)(x) = \int_G f(y) g(y^{-1}x) d\mu(y), \quad (x \in G)$$

$f \in L^1(G)$ に対して, f^* を $f^*(x) = \overline{f(x^{-1})} \Delta(x^{-1})$ (但し \bar{a} は, 複素数 a の共役) と定義すれば, $L^1(G)$ は上の合成積を積とし $f \rightarrow f^*$ を対合とする Banach 代数となる。

$L^1(G)$ の元 f , G の元 s, x に対して,

$$\{\lambda(s)f\}(x) = f(s^{-1}x)$$

によつて定義された $s \rightarrow \lambda(s)$ を G の左正則表現といい,

同様に Banach 代数 $L^1(G)$ の左正則表現 $f \rightarrow \lambda(f)$ を

$$(5) \quad \{\lambda(f)g\}(x) = \int_G f(s)g(s^{-1}x) d\mu(s), \quad (f \in L^1(G), g \in L^2(G))$$

と定義する。

可換の場合と類似な公式

$$(6) \quad \lambda(f) = \int_G f(s)\lambda(s) d\mu(s) \quad (f \in L^1(G))$$

によって $f \rightarrow \lambda(f)$ はグローバルなフーリエ変換と考えることができる。(但し(6)は σ -weak 位相の意味での積分である。)

M を $\{\lambda(a), a \in G\}$ によって生成された von Neumann 代数とすれば, 作用素 $\lambda(f)$ は M に含まれ, M はそれら $\lambda(f)$ が生成する von Neumann 代数である。

今 G が可換と仮定しよう。 $L^1(G)$ のスペクトルは G の双対群と呼ばれる局所コンパクト可換群 \hat{G} になり, M は $L^\infty(\hat{G})$ を, $L^2(G)$ 上の積作用素の代数として表現することによって, $L^\infty(\hat{G})$ と空間同型になる。故に M と $L^\infty(\hat{G})$ を同一視する事により, $L^1(G)$ のフーリエ変換は $L^1(G)$ の M への埋め込みになっている。我々はフーリエ変換とその逆変換の次のような図式を得る。

$$(7) \quad \begin{array}{ccc} L^1(G) & \xrightarrow{\mathcal{F}} & L^\infty(\hat{G}) \\ L^\infty(G) & \xleftarrow{\hat{\mathcal{F}}} & L^1(\hat{G}), \end{array}$$

且つ $\{L^1(G), L^1(G)\}, \{L^1(\hat{G}), L^\infty(\hat{G})\}$ がともに Banach 空間として

双対系になっている。

Pontryaginの双対定理は、次の事を主張している。

$L^1(\hat{G})$ (von Neumann algebra $L^\infty(G)$ の predual) の指標全体の
つくる空間 \hat{G} は局所コンパクト可換群で、はじめに与えられ
た G と位相的代数的に同型となる。

一般の場合にもどって、我々は双対対象 \hat{G} は考えられないが
状況は図式(7)と同じである事がわかる。実際 M を非可換 L^∞ -
空間, predual M_* を非可換 L^1 -空間と考える。

我々の前半の目的は、predual M_* に左正則表現のテンソル
巾を使用して、等距離的対応をもつ可換な半単純 Banach 代数
の構造を入れることである。

G の表現 $x \rightarrow \lambda(x) \otimes \lambda(x)$ ($\lambda(x)$ のテンソル巾) は左正則表現
 $\lambda(x)$ の $\bar{\text{fold copy}}$ (但し $\bar{\text{fold}}$ は $L^2(G)$ の次元) である。すなわ
ち表現 $x \rightarrow \lambda(x) \otimes 1$ (1 は $L^2(G)$ の単位作用素) は表現 $x \rightarrow \lambda(x) \otimes \lambda(x)$
とユニタリ同値である。この同値性を与える $L^2(G \times G)$ の上の
特別なユニタリ作用素は、

$$(8) \quad (wf)(x, y) = f(x, xy) \quad (f \in L^2(G \times G))$$

によって定義される。

$t \in M$ に対して、 $\bar{\pi}(t) = w^{-1}(t \otimes 1)w$ と定義すると、 $\bar{\pi}$ は、
 $\bar{\pi}(\lambda(x)) = \lambda(x) \otimes \lambda(x)$ ($\forall x \in G$) を満す M から $M \otimes M$ の中への *

同型写像である。

G が可換の場合, $f \in L^1(G)$ に対して $\lambda(f)$ は f のフーリエ変換 \hat{f} の $L^2(\hat{G})$ 上の積作用素に相当し, 簡単な計算から $\pi(f)$ は, 二変数関数 $\hat{f}(x, y)$ の $L^2(\hat{G} \times \hat{G})$ 上の積作用素に相当する。

$L^1(G) (= L^0(\hat{G})_*)$ の元 F, H に対して合成積 $F * H$ は,

$$(9) \quad \int_{\hat{G}} (F * H)(x) \hat{f}(x) d\hat{\mu}(x) = \iint_{\hat{G} \times \hat{G}} F(x) H(y) \hat{f}(xy) d\hat{\mu}(x) d\hat{\mu}(y) \\ = \int_{\hat{G} \times \hat{G}} (F \otimes H)(x, y) \pi(\hat{f})(x, y) d\hat{\mu} \otimes \hat{\mu}(x, y)$$

なる式を満す。(但し $\hat{\mu}$ は \hat{G} 上の Haar 測度とする。)

この事に注意して, 一般の局所コンパクト群 G に対して, 我々は M_* の合成積を次のように定義しよう。

定義 1. M_* の元 F, H に対して, 合成積 $F * H$ を $(F * H)(t) = (F \otimes H)(\pi(t))$ ($\forall t \in M$) を満す M_* の一意な元として定義する。

但し $F \otimes H$ は, $M_* \hat{\otimes}_{\alpha_*} M_*$ の元で, α_* は鶴丸 [6] の意味の α_0 ノルム α_* の随伴クロスノルムとする。

次に C を $L^2(G)$ における作用素で, $(Cf)(x) = \overline{f(x)}$ ($f \in L^2(G)$) を満すものとする。今 M の元 t に対して $\tilde{t} = CtC$ とすれば, $\lambda(\tilde{t}) = \lambda(t)$ になるから $t \rightarrow \tilde{t}$ は M の共役線型 $*$ -自己同型写像となる。

定義 2. M_* の元 F に対して, \tilde{F} を $\tilde{F}(t) = \overline{F(\tilde{t})}$ と定義する。

§ 2. 補助定理.

補助定理 1. M_* は合成積を積とし, $f \rightarrow \tilde{f}$ を等距離的対応とする可換な Banach 代数になる。

(証明) $\{ \sum_{i=1}^n \alpha_i \lambda(x_i), \alpha_i \text{ は複素数}, x_i \in G \}$ は M において σ -weak 位相に関して密であるから定義 1, 2 より主張は明らかである。

補助定理 2. M_* の元 f に対して $\hat{f}(x) = f(\lambda(x))$ ($x \in G$) とすると \hat{f} は G 上の有界連続関数であり $\overline{\hat{f}(x)} = \widehat{\tilde{f}}(x)$, 且つ $\widehat{f * H}(x) = \hat{f}(x) \hat{H}(x)$ が成立する。

注意. 今後この可換な Banach 代数 M_* を $L(M)$ と書く。

補助定理 3. $L(M)$ は半単純であり, $S \otimes S = E(S)$, $S = \tilde{S}$ を満す M の元 S と $L(M)$ の自己共役な指標 σ の間に $\sigma(f) = f(S)$ ($\forall f \in L(M)$) によって与えられる一対一への対応が存在する。

(証明) σ を $L(M)$ の自己共役指標とすると σ は自動的に $L(M)$ 上の連続線型汎関数となる [例えば [2]] から $\sigma(f) = f(S)$ ($\forall f \in L(M)$) を満す M の元 S が存在する。

$L(M)$ の任意の元 f, H に対して,

$$\begin{aligned} (f \otimes H)(E(S)) &= (f * H)(S) = \sigma(f * H) \\ &= \sigma(f) \sigma(H) = f(S) H(S) \\ &= (f \otimes H)(S \otimes S). \end{aligned}$$

従って $E(S) = S \otimes S$ 。又 $f(\tilde{S}) = \overline{\hat{f}(S)} = \overline{\sigma(\tilde{f})} = \sigma(f) = f(S)$

より $\tilde{S} = S$ である。

逆に $S \otimes S = \pi(cs)$, $\tilde{S} = S$ と仮定する。今 σ を $\sigma(H) = H(cs)$ と定義すると上の逆をなす事により σ が自己共役指標である事がわかる。

すべし σ の自己共役指標に対して $\sigma(H) = \sigma(H)$ が成立すれば、
 $\pi(\lambda(x)) = \lambda(x) \otimes \lambda(x)$, $\lambda(\tilde{x}) = \lambda(x)$ より $H(\lambda(x)) = H(\lambda(x))$ ($\forall x \in G$)。
 又 $\{ \sum_{i=1}^n d_i \lambda(x_i) \mid d_i \text{ は複素数}, x_i \in G \}$ は M の中で σ -weak 位相に関して密であるから $H = H$ 。故に $L^1(M)$ の半単純性が証明された。
 (証明終り)

補助定理 4. $\{ H; H \in L^1(M), \hat{H} \in L^2(G) \} = L^1_2(M)$ と置き、
 $\mathcal{L} = \{ \hat{H}; H \in L^1_2(M) \}$ とする。 \mathcal{L} は $L^2(G)$ で uniform 位相で密であり $L^\infty(G)$ で弱位相に関して密である。

証明) $L^1(M)$ の元 $W_{f,g}$ ($f, g \in C_c(G)$) を

$$W_{f,g}(a) = (af, g) \quad (\forall a \in M)$$

と定義すると簡単な計算から $\widehat{W_{f,g}} = \bar{g} * \Delta f$ となり $W_{f,g} \in L^1_2(M)$ である。故に $\{ f * g; f, g \in C_c(G) \} \subset \mathcal{L}$ であるから、
 \mathcal{L} は $L^2(G)$ で uniform 位相で密である。

\mathcal{L}_0 を $\{ f * g; f, g \in C_c(G) \}$ によって生成された G 上の連続関数の代数とする。 \mathcal{L}_0 は自己共役で、 G の点を分離するから $C_0(G)$ で一様位相で密、従って $L^2(G)$ で弱位相で密で

ある。故に \mathcal{L} は $L^1(G)$ で弱位相に関して密となる。

(証明終り)

補助定理 5. $L^1(M)$ の元 F , M の元 S に対して $\widehat{FS}(a) = \widehat{F}(Sa)$ ($\forall a \in M$) と定義すると $\widehat{F_S} \in L^2(G)$ であり $\widehat{F_S} = \widetilde{S^*} \widehat{F}$ μ -a.e. である。

(証明) $S \in M$ より Kaplansky の定理から $\lambda(f_\alpha) \rightarrow S$ (σ -weak 位相), $\|\lambda(f_\alpha)\| \leq \|S\|$ なる如き $L^1(G)$ の元の有向系 $\{f_\alpha\}$ を撰べる。

今 $g \in L^1(G) \cap L^2(G)$ とすると

$$\begin{aligned} (S^* \widehat{F}, g) &= \int_G \widehat{F}(x) (S \bar{g})(x) d\mu(x) \\ &= \lim_\alpha \int_G \widehat{F}(x) (\lambda(f_\alpha) \bar{g})(x) d\mu(x) \\ &= \lim_\alpha \int_G \widehat{F}(x) (f_\alpha * \bar{g})(x) d\mu(x) \\ &= \lim_\alpha F(\lambda(f_\alpha * \bar{g})) \\ &= F(S \cdot \lambda(\bar{g})) \\ &= \int_G F(S \lambda(x)) \bar{g}(x) d\mu(x) \\ &= (\widehat{F_S}, g). \end{aligned}$$

一方 $\widehat{F_S}$ は G 上の有界連続関数であり $\widetilde{S^*} \widehat{F} \in L^2(G)$ だから, $\widehat{F_S} \in L^2(G)$ 且 $\widehat{F_S} = \widetilde{S^*} \widehat{F}$ μ -a.e. が成立する。

(証明終り)

さて $\Gamma = \{S; S \in M, \pi(S) = S \otimes S, \widehat{S} = S\}$ とすると Γ は,
 M の単位球の σ -weak 位相に関してコンパクトな部分集合であるから $\widehat{G} \equiv \Gamma - \{0\}$ は σ -weak 位相で局所コンパクト部分集合となる。

任意の $f, g \in L^2(G)$ に対して,

$$(10) \quad (\widehat{H}f, g) = \int_{\widehat{G}} H(a) d\mu_{f,g}(a) \quad (\forall H \in L^1(M))$$

を満す \widehat{G} 上の一意な有限 Radon 測度 $\mu_{f,g}$ が存在する。何故ならば、補助定理 3 から $L^1(M)$ は $C_\infty(\widehat{G})$ の一様位相に関して密な部分代数 \mathcal{C} として表現されるから $L(H) = (\widehat{H}f, g)$ によって定義される \mathcal{C} の一様位相による連続線型汎関数は $C_\infty(\widehat{G})$ 上のものに一意に連続に拡張できる。故に (10) を満す \widehat{G} 上の Radon 測度 $\mu_{f,g}$ が存在する。

補助定理 6.. $L^2(M)$ の元 E, H, U, V に対して,

$$E(a) \overline{H(a)} d\mu_{\widehat{U}, \widehat{V}}(a) = U(a) \overline{V(a)} d\mu_{\widehat{E}, \widehat{H}}(a)$$

が成立する。

証明) かつてな $L^1(M)$ の元 H に対して,

$$\begin{aligned} \int_{\widehat{G}} H(a) U(a) \overline{V(a)} d\mu_{\widehat{E}, \widehat{H}}(a) &= \int_{\widehat{G}} (H * U * \widetilde{V})(a) d\mu_{\widehat{E}, \widehat{H}}(a) \\ &= (\widehat{H * U * \widetilde{V} \cdot \widehat{E}}, \widehat{H}) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= (\hat{H} \hat{U} \bar{\hat{V}} \hat{E}, \hat{H}) \\
&= (\hat{H} \hat{E} \bar{\hat{H}} \hat{U}, \hat{V}) \\
&= \int_{\hat{G}} H(a) E(a) \overline{H(a)} d\mu_{\hat{U}, \hat{V}}(a).
\end{aligned}$$

$L^1(M)$ が半単純であるから $\int_{\hat{G}} U(a) \overline{V(a)} d\mu_{\hat{E}, \hat{H}}(a) = \int_{\hat{G}} E(a) \overline{H(a)} d\mu_{\hat{U}, \hat{V}}(a)$ が成立する。

(証明終り)

補助定理 7. 次の (i) (ii) を満す \hat{G} 上の非負値 Radon 測度 $\hat{\mu}$ が存在する。

$$(i) \quad (\hat{E}, \hat{H}) = \int_{\hat{G}} E(a) \overline{H(a)} d\hat{\mu}(a), \quad E, H \in L^1_2(M),$$

$$(ii) \quad \int_{\hat{G}} H(a) d\mu_{\hat{E}, \hat{H}}(a) = \int_{\hat{G}} H(a) E(a) \overline{H(a)} d\hat{\mu}(a), \quad H \in L^1(M).$$

証明) $L^1_2(M)$ の元 H に対して $U_H \equiv \{s; s \in \hat{G}, H(s) \neq 0\}$ とすると, $L^1_2(M)$ が $L^1(M)$ で弱位相で密より $\{U_H; H \in L^1_2(M)\}$ は \hat{G} の σ -weak 位相による開被覆である。

各々の $f \in C_c(U_H)$ に対して,

$$(ii) \quad \mu_H(f) = \int_{\hat{G}} \frac{f(a)}{|H(a)|^2} d\mu_{\hat{H}, \hat{H}}(a)$$

と定義すると U_H 上の非負値 Radon 測度 μ_H ができる。もし \hat{G} 上の連続関数が, そのコンパクトな台を $U_H \cap U_H$ ($E,$

$\bar{H} \in L^2(M)$ の中にもつてゐるとすると補助定理 6 から $\mu_E(f) = \mu_{\bar{H}}(f)$ である。従つて $\{U_{\bar{H}}, \mu_{\bar{H}}, \bar{H} \in L^2(M)\}$ は \hat{G} の $U_{\bar{H}}$ の制限が $\mu_{\bar{H}}$ であるような \hat{G} 上の非負値 Radon 測度 $\hat{\mu}$ を定義する。[例えば [1], 第一章, §3 命題 1 参照]

(ii) 式により $d\mu_{E, \hat{H}}(a) = E(a) \overline{\hat{H}(a)} d\hat{\mu}(a)$ ($E, \hat{H} \in L^2(M)$) が成立。故に (ii) が示された。

$\mu_{E, \hat{H}}$ は \hat{G} 上の測度が有限であるから E ($\in L^2(M)$) の $\hat{\mu}$ に関する 2 乗可積分性がいえる。又 $L(M)$ の半単純性により, $\|H_\alpha\|_\infty \leq 2$, 且つ \hat{G} 上のコンパクト収束位相に関して $H_\alpha \rightarrow 1$ なる如き $L(M)$ の元の有向系 $\{H_\alpha\}$ が存在する。等式 (ii) により,

$$\begin{aligned} \int_{\hat{G}} H_\alpha(a) |\hat{H}(a)|^2 d\hat{\mu}(a) &= \int_{\hat{G}} H_\alpha(a) d\mu_{\hat{H}, \hat{H}}(a) \\ &= \int_{\hat{G}} \hat{H}_\alpha(x) |\hat{H}(x)|^2 d\mu(x). \end{aligned}$$

故に $(\hat{H}, \hat{H}) = \int_{\hat{G}} |\hat{H}(a)|^2 d\hat{\mu}(a)$ となり (i) が成立する。

(証明終り)

補助定理 8. M_p を M の射影作用素全体とすると $M_p \cap P = \{0, 1\}$ である。

証明) $M'(M \text{ の交換子 }) \supset \{f(x); x \in G, x \rightarrow f(x)\}$ は G の右正則表現 ρ であるから $e \in P \cap M_p$ に対して $(1-e)L^2(G) = \mathcal{M}$ とすると閉部分空間 \mathcal{M} は右移動に関して不変である。

次に $L^\infty(G)\mathcal{M} \subset \mathcal{M}$ を示そう。そのためには補助定理4から $\mathcal{L}_e\mathcal{M} \subset \mathcal{M}$ を示せば充分である。 $\widehat{e^*} = e$ より $f \in L^2(M)$ に対して補題5から $e\hat{f} = \hat{f}e$ (μ -a.e.) であり $e\hat{f} \in L^\infty(G)$ である。又 $H \in L^2(M)$ に対して,

$$e(\hat{f}\hat{H}) = (e\hat{f})(e\hat{H}) \quad \mu\text{-a.e.}$$

何故ならば,

$$\begin{aligned} (f * H)(e(\lambda(x))) &= (f * H)(e\lambda(x)) \\ &= (f \otimes H)(\Xi(e\lambda(x))) \\ &= (f \otimes H)((e\lambda(x)) \otimes (e\lambda(x))) \\ &= f(e\lambda(x)) \cdot H(e\lambda(x)). \end{aligned}$$

故に $e(\hat{f}\hat{H}) = (e\hat{f})(e\hat{H})$ μ -a.e. である。一方 \mathcal{L}_e が $L^2(G)$ で一様位相で密であるから $e(\hat{f}g) = (e\hat{f})eg$ ($\forall g \in L^2(G)$) が成立する。従ってもしも $g \in \mathcal{M}$ とすると $e\hat{f}g = 0$ すなわち $\mathcal{L}_e\mathcal{M} \subset \mathcal{M}$ 。[例2は [7] p.42. 第二章参照] により $e=1$ 又は0である。

(証明終り)

補助定理9. \hat{G} の元は M のユニタリ作用素になり, 作用素の積に関して σ -weak 位相で局所コンパクト群である。又 $\hat{\mu}$ は、その左 Haar 測度となる。

証明) \hat{G} の元 s , $L_2(M)$ の元 E, F に対して,

$$\begin{aligned} \int_{\hat{G}} E(sa) \overline{F(a)} d\hat{\mu}(a) &= (\hat{E}_s, \hat{F}) = (s\hat{F}, \hat{E}) \\ &= (\hat{E}, s\hat{F}) \\ &= \int_{\hat{G}} E(a) \overline{F(s^*a)} d\hat{\mu}(a). \end{aligned}$$

補助定理 3 によって, $(C(\hat{G}))$ の元 f, g に対して,

$$(12) \quad \int_{\hat{G}} f(sa) g(a) d\hat{\mu}(a) = \int_{\hat{G}} f(a) g(s^*a) d\hat{\mu}(a)$$

が成立する。

次に \hat{G} の任意の σ -weak 位相に関してコンパクトな集合 K に対して $H = \{t; t \in \hat{G} \text{ } st \in K\}$ が又 σ -weak 位相に関してコンパクトになる事を証明しよう。

まず $s \in \hat{G}$ に対して, $x \in M \rightarrow sx \in M$ なる写像が一対一で, σ -weak 位相で連続である事を示そう。ある $x \in M$ に対して $sx = 0$ とすると $s^*sx = 0$ より $s \geq 0$ と仮定して一般性を失なわぬ。(\hat{G} は積に関して閉じている。) 又任意の自然数 n に対して s^n (s の正の n 乗根) は \hat{G} の元である。そして s^n は s の支持射影作用素 e に s -位相で収束するから $e \in \hat{G}$ であり, 補助定理 8 により, $e = 1$ である。故に $x = 0$ 。

この写像が σ -weak 位相で連続な事は, 明らかであるから, $sH = (s\hat{G} \cup \{0\}) \cap K$ が $\hat{G} \cup \{0\}$ の σ -位相に関してコンパクト

コンパクトな部分集合である事に注意して、 H は $\hat{G} \cup \{0\}$ で σ -weak 位相でコンパクトである。又 H の元の有向系 $\{x_\alpha\}$ が 0 に (σ -weak 位相で) 収束するなら $s x_\alpha \rightarrow 0(\sigma)$ である。しかるに、 $s t_\alpha \in sH = K$ 。これは矛盾である。故に H は \hat{G} の σ -weak 位相による閉部分集合となる。

今 $C_c(\hat{G})$ の元 f の台 K に対して上に述べた事により、 $f(t)=1$ ($st \in K$) $f(st)=1$ ($t \in K$) なる如き $C_c(\hat{G})$ の元 g が存在する。(12)式によって、

$$\int_{\hat{G}} f(st) d\hat{\mu}(t) = \int_{\hat{G}} f(t) d\hat{\mu}(st) \quad (\forall f \in C_c(\hat{G})).$$

故に $L^2(M)$ の元 E, F に対して \hat{G} の元 s をとれば、

$$\begin{aligned} (s^* \hat{E}, s^* \hat{F}) &= \int_{\hat{G}} E(sa) \overline{F(sa)} d\hat{\mu}(a) \\ &= \int_{\hat{G}} E(a) \overline{F(a)} d\hat{\mu}(a) \\ &= (\hat{E}, \hat{F}). \end{aligned}$$

補助定理 4 から $(ss^* f, g) = (f, g)$ ($\forall f, g \in L^2(G)$) が成立するから $ss^* = 1$ 又同様にして $s^* s = 1$ である。故に s はユニタリ作用素で、 \hat{G} は左 Haar 測度 $\hat{\mu}$ をもつ、作用素の積を群の演算とする σ -weak 位相に関する局所コンパクト群である。

(証明終り)

§ 3. 定理.

定理. (双対定理) 上に構成された局所コンパクト群 \hat{G} は、最初に与えられた局所コンパクト群 G と位相的、代数的に、同型である。この同型写像は $x \in G \rightarrow \lambda(x) \in \hat{G}$ により与えられる。

証明) 写像 $x \in G \rightarrow \lambda(x) \in \hat{G}$ が G から \hat{G} 上への同型写像である事を示そう。まずこれが G から \hat{G} の中への一対一連続な写像であることは知られている。これが位相同型写像であることをいうには、 \hat{G} 上で σ -weak 位相と s -位相とが一致するから次の事を示せば充分である。 V を G の単位元の任意に与えられたコンパクトな近傍とする。 f を $\|f\|_2 = 1$, $\text{supp.}(f) \cdot i \text{supp.}(f) \subset V$ なる如く選ぶ。今 $\|\lambda(a)f - f\|_2 < 1$ ならば $a \in V$ なることが容易に確かめられる。従ってこの写像が上への写像であることをいえば、定理の証明は終る。

上の写像による G の像を G' とすると G' は \hat{G} の閉部分群である。今 \hat{G} 上の非負値 Radon 測度 ν を

$$\int_{\hat{G}} f(s) d\nu(s) = \int_G f(\lambda(x)) d\mu(x) \quad (f \in C_c(\hat{G}))$$

と定義する。 $\mathcal{D} = \{ f(s) \mid f(s) = \overline{H}(s) \mid H \in L^1_2(M) \}$ $\mathcal{D}^\perp = \{ \sum_{j=1}^n f_j \bar{g}_j \mid f_j, g_j \in \mathcal{D} \}$ と置く。今 $f \in \mathcal{D}^\perp$ とすると、 $f = \sum_{j=1}^n g_j \bar{h}_j$ 但し $g_j(s) = G_j(s)$, $h_j(s) = H_j(s)$, $G_j, H_j \in L^1_2(M)$, $s \in \hat{G}$ 。

[1.11] の定義から $f \in L^1(\hat{G}, \nu)$ であり,

$$\begin{aligned} \int_{\hat{G}} f(s) d\nu(s) &= \int_G f(\lambda(x)) d\mu(x) \\ &= \sum_{j=1}^{\infty} \int_G \hat{G}_j(x) \hat{H}_j(x) d\mu(x) \\ &= \sum_{j=1}^{\infty} (\hat{G}_j, \hat{H}_j). \end{aligned}$$

さらに $t \in \hat{G}$, $E \in L^1_2(M)$ に対して, 補助定理 5 から $\widehat{E_{t*}} = t\hat{E}$ であるから

$$\begin{aligned} \int_{\hat{G}} f(t*s) d\nu(s) &= \sum_{j=1}^{\infty} (t\hat{G}_j, t\hat{H}_j) \\ &= \sum_{j=1}^{\infty} (\hat{G}_j, \hat{H}_j) \\ &= \int_{\hat{G}} f(s) d\nu(s). \end{aligned}$$

[例えば [3] 系 1.4] を ν と ν の左移動に應用して ν が \hat{G} 上の左 Haar 測度となり ν が G' 上に集中しているから $G' = \hat{G}$ である。

(証明終り)

注. 以上の議論で我々は $\tilde{u} = u$, $u \otimes u = \overline{\pi}(u)$ と仮定したが実は, $u \otimes u = \overline{\pi}(u)$ のみから u がユニタリ作用素且つ $\tilde{u} = u$ がでてくる。故に $L^1(M)$ の指標はみな自己共役である。くわしい事は略す。

なお P. Eymard [L'algebre de Fourier d'un groupe localement compact; Bull. Soc. math. France, 92 (1964) pp 181~236]

は、 $L^1(M)$ の逆変換 ($\hat{f} \in L^1(M)$ に対して $\hat{\hat{f}}$ としたもの)全体をつくる $C_\infty(G)$ の部分代数に $L^1(M)$ によるノルムを入れ Fourier algebra と名づけ (可換の場合との類似性により $A(G)$ と書く), この $A(G)$ を使用して G 上の調和解析を展開しているものであるがその中で我々の定理を別の方法で導いている。詳細は原論文にゆずる。

以上。

References

- [1] N. Bourbaki; *Intégration*, Paris, (1952).
- [2] L. H. Loomis; *An introduction to abstract harmonic analysis*, New York, (1953).
- [3] W. F. Stinespring; *Integration theorems for gages and duality for unimodular groups*, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 90(1959), 15-56.
- [4] M. Takesaki; *A characterization of group von Neumann algebras of locally compact unimodular groups as a converse of Tannaka-Stinespring-Tatsuuma duality theorem*, To appear.
- [5] N. Tatsuuma; *A duality theorem for locally compact groups*, *J. Math. Kyoto Univ.*, 6(1967), 137-293.
- [6] T. Turumaru; *On the direct product of operator algebras III*, *Tôhoku Math. J.*, 6(1954), 208-211.
- [7] A. Weil; *L'intégration dans les groupes topologiques et ses applications*, Paris, (1938).
- [8] K. Saitô; *On a duality for locally compact groups*, To appear in *Tôhoku Math. J.*.